

## 「知るということ」

佐藤 洋平

独立行政法人 農業環境技術研究所 理事長

### 1. ツ＝パイダ

強く記憶に残る言葉の一つである。今でも折々にふと頭に浮んでくる言葉である。初めてこの言葉に接したときに受けた強烈な印象がそうさせているのであろう。

大野盛雄はアフガニスタンの農村調査研究で優れた業績を上げていた。その彼が東洋文化研究所で開講していた大野ゼミに私は顔を出していた。大学院では、土地の権利関係を調整し再設定する「換地」を研究の対象にしていたので、権利関係の調査にとって農村調査という科学的手段を学ぶことが幾ばくか役に立つであろうと考えてのことである。このようなこともあって、後に、大野が「アフガニスタンの農村から」（岩波新書、1971年9月20日発行）を出版したのを知り直ちに購入した。早速手に取り序章のページを開くやいなや目に飛び込んできたのがこの言葉「ツ＝パイダ」である。

この序章は「休閒地の畑を仕切った低い土塀の向うから、一人の農夫がひょっと顔をのぞかせて何かパシトゥ語で話しかけた。私にはパシトゥ語はわからないが、ただ「ツ＝パイダ」という一言がひどく印象的で、いつまでもその響きが耳に残ってしかたがなかった。」という文章で始まっていた。私は、著者と一人の農夫との関係、その場の情景を自分が今その場で見ているかのような錯覚に捕らわれた。「ツ＝パイダ」というのは、「何のためになるか」という意味だそうである。」と、続くパラグラフで彼は述べる。そして、科学のための手段である農村調査について思考をめぐらせ、調査者と被調査者との間に横たわる「断絶」を金魚鉢のガラスに例えて論考し、「金魚鉢の外からガラス越しに金魚を眺めるというわけにはいかない。」「入るとすれば、金魚としてであろうか、メダカとしてであろうか、それとも藻としてだろうか、底に敷かれた小石としてだろうか」と。「ツ＝パイダ」に対して私はメダカになったような気がして、身構えたことを思い出す。・・・その内容には、私を足元からゆさぶるだけの力

があった」と大野は述懐している。

アジアの農村調査へのある種のあこがれを抱かせる強い興味とともに、私もいつか本を著すときにはこうした序文を書きたいと思った。そして、情景についての錯覚とともに、その言葉の意味と併せて「ツ＝パイダ」が強く記憶に残る言葉となった。それ以来、「知ること」との営為に際して、「ツ＝パイダ」がふと私の頭をよぎる。

## 2. 経済社会と経済学

近頃では「評価」は組織、個人を問わずあらゆる局面で行われるようになった。大学における研究、教育の評価を全国の大学に先駆けていち早く試行することにした筑波大学では、研究の評価をいくつかの「学系」において実施し、教育の評価は「学類」において、学内のモデルケースとして私の担当していた社会工学類を対象に行うこととなった。

社会工学類の教育は社会工学系の教官によって担われていたので、この学類を構成する社会経済計画、経営工学、都市計画の3専攻それぞれの担当から選出された学系教官で組織された評価準備委員会のもとに準備が進められた。卒業生全員を対象とするアンケート調査、卒業生が就職している企業への調査、担当教官やカリキュラムなど学類における教育の実態を把握する上で必要な種々の資料やデータの収集および整理などにほぼ1年間が費やされ準備が整えられた。評価委員は、近藤次郎東大名誉教授を委員長に各専攻分野に造詣の深い著名な識者によって組織され、書類審査、実地審査、そして当該学類でのヒヤリングが行われた。

評価準備委員会に対するヒヤリングが行われた時のことである。社会経済計画専攻について説明を担当した教授は、当該専攻が、1, 2を除きすべて、アメリカの大学でPhDをとった教官(約30名の教授および助教授)で担当されていることを誇らしげに語った。説明を受けた評価委員の竹内啓東大教授が「アメリカ経済を勉強した人が日本経済を分かるんでしょうかね」とさりげなく言った。普段から学系ゼミなどで経済学に接する機会を多く持っていたので、私には何となくその発言の趣旨が分かる気がして「寸鉄人を刺す」発言だと思った。しかし、その場での説明者当人のキョトンとした顔つきと同じように、私

も深くその意味を理解できたというわけではなかったので、「何となく」の曖昧さがいつも気にかかっていた。

後日、宇沢弘文著「近代経済学の再検討」（岩波新書、1977年5月20日発行）を読み、この「何となく」の曖昧さに対するもやもやとした気分が霧消した。イギリスで生まれた経済学は、その研究の中心がアメリカの大学に移ってゆき、それにともなって経済学の性格も大きく変化したことがそこには詳しく述べられていた。いわく、「ミクロ経済分析の論理的精緻化という一面を持つ」「社会科学としてよりも自然科学的な方法をもって再構築しようとする考え方が支配的」「形式論理性を重要視」「経済現象の実態的側面にふれることなく、むしろ現象的側面に焦点を当てようとする」「計量経済学の分野に多くの人々が集まり、現実的重要性を問わない抽象的な議論に終始」。また、マッカーシズムの名のもとに行われた知的なパージが社会的正義という観点から経済学を学ぶことが個々の研究者にとって危険な現実をもたらす中であって、「若い研究者はもっぱら経済学をたんに知的な遊戯として取り扱っていった」と。多くの例外はあるが、このような性向がアメリカにおける経済学研究の主流を特徴づけるものであったことがよく理解でき、目から鱗が落ちた。

アメリカ社会が抱える特殊な条件のもとに発達した近代経済学を学び、この近代経済学という「正統的な経済学」の思考法に忠実にもとづいて分析を行おうとする人たちが、はたして、日本経済が抱える諸問題を解明し、分析するための理論的枠組みを用意することができるのか、という鋭い、まさに「寸鉄人を刺す」発言であったことの認識を新たにした。

### 3. 知的洞察力とセンス

ある問題を解明し分析するためには、科学の専門家として、研究者は当該分野についての知識を広くかつ深く蓄えていることが求められる。先に述べた近代経済学の例においても、たとえばアメリカ経済学という一面があるとはいえ、その思考法を身につけ、かつ、その限界についても理解することが必要であることは言を俟たない。しかし、問題を解明し分析するためには、それだけでは十分ではない。そのための適切な理論的枠組みを用意することができるだけの、問題を洞察する知力が伴わなければならない。

優れた知的洞察力を養うにはどうすればよいか。なかなか難しい問題ではあるが、自身への「ツ＝パイダ」という不断の問いかけは欠かせない。それに加えて、近頃私は、それはある種のセンスに関係する問題ではないかと思うようになった。芸術については誰しもがセンスと関連づけて考える。芸術家を目指すにはセンスが必要だなどというのがその例である。これを生まれつきの才能と解すれば、芸術の場合にはそうかもしれないと思えるが、科学のように知るということを営為とする場合にはそうとも限らないのではないかと、生まれつきの才能が全てを規定するというものでもないのではないかとも思う。しかし、センスとしか言いようがないような何かがそこにはあるように思う。センスが関係する具体の例として、誰しも、構想、着想、ひらめき、セレンディピティ、観点、視点などが思い当たるであろう。高い知的洞察力に導かれた理論的枠組みが、くだんの問題をよく解明し分析するかどうかの極めつき先端におけるつばぜり合いでは、センスの有無が機能しているように思えてならない。